



クロワッサンでキッシュ

まつもとまい
松本舞さん(広島5町内)

キッシュの生地をクロワッサンで代用するのがわが家流です。具材には余ったポテサラや肉じゃがなどをを使って、子どもたちも飽きずに食べてくれます。家族みんな大好きなウインナーも忍ばせて。

南極地域観測隊の任務を終えて帰国した夫が、よく家の台所に立ってくれます。夫が作ってくれる晩酌のアテが、毎晩の楽しみです。



おだやかで優しい人柄の松本さん



【材料】

クロワッサン1袋4個入り、余っている野菜(ブロッコリー、青物など)、カボチャのポテサラ(残りの副菜など)、卵2個、牛乳90cc、塩こしょう適宜

【作り方】

- ①キッシュ型(耐熱容器でもOK)にクッキングシートを敷く。そこに半分にスライスしたクロワッサンを、薄くつぶすようにして敷き詰め、土台の生地とする。
- ②キッシュのタネを作る。ポテサラなど水分を含んだ副菜は、あらかじめフライパンで火を通して水分を飛ばす。ブロッコリーなどの野菜は食べやすい大きさに切って炒める。
- ③溶き卵に牛乳を加え、軽く塩こしょうをして、②の具材と合わせる。(※具材と卵液のバランスは牛乳で調整)
- ④①の型に③のタネを入れ、アルミホイルでふたをする。予熱をしたオーブンに入れ、200度で10分ほど蒸し焼きにしたらアルミをはがし、さらに15分ほど焼いて完成。



前に愛猫は命をまっとうしましたが、あの子のおかげでここに来て本当によかったです」と順子さん。夫の浩一さんは一級建築士。これまで、数々の建築物に携わってきましたが、実は損害保険登録鑑定人というもう一つの顔も持っています。「県内外の災害地におもむき、被災した家屋の損害状況を鑑定をするわけですが、あの時、絶望の中にいらつした方々が、今は幸せになつていてほしいという思いがいつも心にあります」と言つて浩一さんは少し涙ぐみます。きつと、聞き手には計り知れない、被災地で心を通わ



今でもラブラブな宮本さん夫婦

し合つた人たちとの時間が思い出されるのでしょう。そんな浩一さんにそつと寄り添う順子さん。聞けば2人は再婚同士とか。「夫は優しくて、一緒にいて楽しいんです」と、今でも新婚さんのような2人に「ごちそうさま」。



散歩の終わりに

福原地区の西の方角に、金峰山や長崎の普賢岳の姿をとらえることができます。この季節、金峰山の右側に大きな夕日がまっすぐに落ちていくそうです。その荘厳な美しさは息をのむほどだとか。「買い物をするにはちよつと不便だけど、ここにしかない宝があります」と言つた宮本順子さんの言葉が心に残ります。今回の出会いに感謝。



ニラの出荷作業も楽しそうな、後藤ファミリーと仲間たち

福原橋を渡り南方に進むと南地区が広がります。家族でニラ栽培に汗を流す後藤保博さんを訪ねました。作業場では朝取りのニラの選別と出荷作業に追われていました。「私が嫁に来たころは、作業場の横に水車小屋がありました」と妻の美智子さんが手を休めずに話します。保博さんは「祖父や父の代に水車の商いばしよつてね。家の横を流れる赤井川の水を引いて水車を回し、米や麦を精米したり粉をひいた

赤井川の流れと家々の営み

りね。近くにも水車小屋がいくつかあつて、うちは『後藤車』と呼ばれよつたね」と懐かしみます。

そんな後藤さん夫婦の楽しみは、週末に顔を見せる2人のひ孫との時間。聞けば後藤家は女系家族。娘や孫娘に囲まれてきた保博さんに3年前、孫娘の丸山寿世さんの長男でひ孫にあたる凜多朗君が誕生しました。その時の保博さんの喜びは、い

かばかりだったことでしょう。笑い声の絶えない後藤さんの作業場を後にして、近くを流れる赤井川のほとりまで足を進めてみました。川内田地区から流れ来る水のせせらぎが、汗ばんだ体にしばしの涼を与えてくれました。



右 / 後藤さんの水車の話を聞いた後で、しみじみと赤井川の流

早苗田に風が立ち、豊かな秋の実りを思います。ここで米作りに励んでいるのが中島盛光さんです。「この辺りの田んぼは区画整理がされておらず、形も大きさも違うけん、小型の田植機しか田んぼに入らんとです」と中島さん。情緒ある田園風景の裏には、そんな苦労もあるようです。話は変わりますが、中島さんの庭には高さ5メートルほどの大きな庭石が鎮座しています。「珍しがって写真を撮りに来る人もいますよ」と

青田に風が立って



中島さんの自慢の庭石。想像以上の大きさです



いろんな話を聞かせてくれた中島さん



南地区の田んぼの田植えが終わりました

自慢気な中島さんの好きな言葉は「木を見て森を見ず」。細かいことに気を取られ、全体像を見失うべからず」という信条が、この大きな庭石に込められているようでした。

被災地に向き合つて

22年前、南地区に移住した宮本浩一さんと順子さん夫婦がいます。「両親が飼つていた愛猫を引き取るために一軒家を探したところ、この家にご縁をいただきました。数年